

日本版 KABC-II 開発における統計作業の実際：  
服部環へのインタビューから<sup>1</sup>

鈴木朋子<sup>1</sup>・安齋順子<sup>2</sup>

The Laboriousness of Psychometrics in Revising Japanese KABC- II

Tomoko Suzuki<sup>1</sup>

Junko Anzai<sup>2</sup>

<sup>1</sup>横浜国立大学教育学部

<sup>2</sup>法政大学現代福祉学部 兼任講師

<sup>1</sup>Yokohama National University, College of Education

<sup>2</sup>Hosei University, Faculty of Social Policy and Administration

## はじめに

知能検査は、心理学における重大な「発明」と考えられている（佐藤・溝口，1997）。現在，心理臨床場面で使用されている知能検査は，1905年に，フランスで学習不振児の取り出しを目的にビネ（Binet,A.;1857-1911）とシモン（Simon,T.;1873-1961）が開発した「異常児の知的水準を診断するための新しい方法（Méthodes nouvelles pour le diagnostic du niveau intellectuel des anormaux）」が源流とされている。1939年には，患者の診断を目的としたウェクスラー式知能検査（Wechsler Bellevue Intelligence Scale）がウェクスラー（Wechsler,D.;1896-1981）によって発表され，知的能力の個人内差異を分析することが可能となった。ビネ・シモン式知能検査，ウェクスラー式知能検査は各国に翻訳され発展しており，日本でも定期的に改訂が行われている。

さて，ビネ・シモン式知能検査やウェクスラー式知能検査と異なり，教育的な働きかけの方向性を知る目的で開発された知能検査に，Kaufman Assessment Battery for Children（K-ABC）がある。K-ABCは，知的能力を認知処理過程と習得度に分けて捉える検査で，1983年にカウフマン夫妻

---

<sup>1</sup> 本研究は，科学研究費補助金(15K04117「発達検査デジタルアーカイブ」の構築，19K03336心理検査開発者オーラルヒストリーによる日本心理検査史)の助成を受けたものです。

(Kaufman,A.S.<sup>2</sup>;1944-, Kaufman,N.L.<sup>3</sup>;1945-)によって発表され、2004年にKABC-IIとして改訂された<sup>4</sup>。日本改訂版は、1993年に、松原達哉・藤田和弘・前川久男・石隈利紀による「K-ABC心理・教育アセスメントバッテリー」が丸善メイツより発売された。2013年には、藤田和弘・石隈利紀・青山真二・服部環・熊谷恵子・小野純平による日本版KABC-II制作委員会によって「日本版KABC-II」が丸善より刊行された。日本版KABC-IIでは、米国原版ではKTEAに吸収された習熟度尺度を発展させ、語彙、読み、書き、計算、推論の5つの基礎学力が測定出来る個別式習得尺度が含まれていることが大きな特徴である(日本版KABC-II制作委員会, 2013)。

知能検査開発者オーラルヒストリーを収集する中で(鈴木・溝口, 2015; 鈴木・鈴木・安齋, 2016; 鈴木, 2017; 鈴木, 2018; 鈴木・小泉, 2019;), 「日本版KABC-II」の改訂でノルム作成等の統計作業と習得尺度の下位検査作成を担当した, 法政大学教授の服部環にインタビューを行う機会を得た。服部は, 筑波大学第一学群自然学類に入学, 1980(昭和55)年筑波大学第二学群人間学類卒業。1982(昭和57)年, 筑波大学大学院修士課程教育研究科修了, 1987(昭和62)年, 筑波大学大学院博士課程心理学研究科修了(教育学博士), 同年宇都宮大学教育学部講師。1989(平成元年)年, 宇都宮大学教育学部助教授, 1999(平成11)年, 筑波大学心理学系助教授, 2004(平成16)年, 筑波大学大学院人間総合科学研究科助教授。2007(平成19)年, 筑波大学大学院人間総合科学研究科教授, 2011(平成23)年, 筑波大学人間系教授。2013(平成25)年より法政大学現代福祉学部臨床心理学科教授。ELEC賞受賞(連名, 第二対象者)。「教育心理学研究」編集委員長, 日本テスト学会編集出版委員会編集幹事等を務めた(服部, 2019および服部本人による)。日本版KABC-II改訂に関して, 日本版KABC-II作成委員会委員として『日本版KABC-IIマニュアル』, 『日本版KABC-II換算表』の出版に携わっている。なお人物名の敬称は論文の慣例に従って省いた。

## 服部環へのインタビュー

インタビュー日程: 2016年7月15日

場所: 西八王子駅前飲食店にて

インタビュアー: 鈴木朋子, 安齋順子

## KABCIIの開発に携わったきっかけ

鈴木: 服部先生がKABC-IIに携わったきっかけはどのようなことだったのでしょうか。

服部: 筑波大学で藤田先生<sup>5</sup>とはよく顔を合わせていたわけですが, 藤田先生から「今度こういう検

---

<sup>2</sup> アラン・カウフマンは、1965年にペンシルバニア大学を卒業、1970年にコロンビア大学のソーンダイク(Thorndike,R.L.;1910-1990)のもとでPh.D.を取得した。1970年代よりウェクスラーのもとでWISC-Rの改訂を行い、ジョージア大学准教授、アラバマ大学教授、エール大学教授を歴任した。

<sup>3</sup> ネイディーン・カウフマンは、1978年にコロンビア大学大学院で特別支援教育(神経科学)のEd.D.を取得、アラバマ大学やエール大学医学部児童研究センターで教鞭をとった。

<sup>4</sup> カウフマン夫妻は、K-ABCの他に、Kaufman Test of Educational Achievement (K-TEA), Kaufman Brief Intelligence Test (K-BIT), これらの改訂版(KABC-II, KTEA-II, KBIT-2), Kaufman Survey of Early Academic and Language Skills(K-SEALS), Early Screening Profiles, Kaufman Adolescent and Adult Intelligence Test (KAAT), Kaufman Short Neuropsychological Assessment Procedure(K-SNAP), Kaufman Functional Academic Skills Test(K-FAST)を開発している。

<sup>5</sup> 藤田和弘(1942-)。東京教育大学大学院教育研究科修士課程修了, 同博士課程中退。東京教育大学

査を作ることがあったら頼むよ」のように言われたことが2, 3度ありました。図書文化社の常務の方にも「将来こういう企画があるので、そのときになったら、もしかしてお手伝いをお願いするかもしれません、ご協力してもらえませんか」のような感じで、立ち話で言われたことはありました。それから2, 3年過ぎた頃ではないでしょうか、実際にその企画が動き出して、日本版を作るところから委員会に加わることになりました。

鈴木：先生はKABC-IIの前に、別の知能検査に関わっていらしたのでしょうか？

服部：学生時代の、例えば集団式の知能検査がありますよね。こういう問題を作ると決まったときに、そのコンセプトに応じて作問をする仕事でお手伝いさせて頂きました。

鈴木：集団式の知能検査というのは例えば、近年などですと。

服部：例えば、図書文化社の「サポート」<sup>6</sup>という学力検査と知能検査を一緒にしたシステムがあるのですけれども、その前の学年別の知能検査です。

安齋：では、集団知能検査でのお仕事が先にあって、KABC-IIへと続いたわけですね。

服部：そうですね。それがあって、図書文化社でその集団式知能検査を改訂するときに、お手伝いをしました。その集団式検査は今でも改訂されていますけど、改訂のところからはその検査については直接の関係はなくて、最初のみだけでした。その後の改訂は研究所と他の先生方が中心となって進めていると思います。それと、集団知能検査は学力検査とテストバッテリーを組むことが多いですが、それも応用教育研究所<sup>7</sup>の所員の方が担当されています。

鈴木：筑波大学ではどなたの指導を受けられたのでしょうか。

服部：院生の頃の指導教員は海保博之先生<sup>8</sup>です。

鈴木：海保先生の研究室では伝統的に、そのような心理検査の統計に協力していたのでしょうか？

服部：いや、それはないです。統計理論については先輩も協力されていたと思いますが、作問や集計になると私だけだったように思います。海保先生はいくつか心理検査を開発されたことがあって、一度、お手伝いしたことがありました。企業で使う検査でした。

鈴木：では、普段われわれが目にしなないタイプのものですね。

服部：ええ。ある部門に特化した検査でした。内山先生<sup>9</sup>と海保先生が担当されていて、そこでお手

---

教育学部助手。筑波大学心身障害学系教授、九州保健福祉大学社会福祉学部教授。2019年現在は吉備国際大学社会福祉学部社会福祉学科教授（藤田, 2012）。

<sup>6</sup> 岡本奎六・海保博之による「サポート：知的個性を生かす学習適性確認システム」のこと。

<sup>7</sup> 一般財団法人応用教育研究所は、「教育の分野において学問と実践との仲立ちをする」ことを目的として、教育評価・測定的基础理論の研究、教育に関するリサーチ、教育・心理検査の研究・開発を行う、図書文化グループに属する研究所である。図書文化は、東京文理科大学、東京高等師範学校、附属中学校、附属国民学校よりなる大塚学園の大塚学園復興会による大学出版部の構想（東京文理科大学内図書文化協会）が、1949年（昭和24）年に社団法人日本図書文化協会として設立されたのに始まる。1950（昭和25）年より教育・心理検査の発行と普及を手掛け、1955（昭和30）年に研究部が独立して「財団法人応用教育研究所」となった（図書文化, 2019）。

<sup>8</sup> 海保博之（1942-）。1965年、東京教育大学教育学部心理学科卒業。1968年、東京教育大学大学院教育学研究科修了。教育学博士（筑波大学）。筑波大学教授、東京成徳大学教授、筑波大学名誉教授。日本心理学会常務理事、機関誌編集長、日本教育心理学会常任理事を歴任（海保, 2006）。

<sup>9</sup> 内山喜久雄（1920-2012）。1944年、東京文理科大学心理学科卒業、群馬大学助教授を経て東京教育大学教授、筑波大学心理学系教授、筑波大学名誉教授。日本学術会議会員、日本行動療法学会、日本行動医学会、元理事長。専門は臨床心理学。

伝いた形です。教育検査とも発達検査とも違いました。

安齋：まず図書文化社との関わりがあって。

服部：そうです。図書文化社と応用教育研究所です。ただ、今、お話しした企業で使う検査は図書文化社と応用教育研究所のものではありません。

安齋：では、個別の知能検査は KABC-II が初めてのお仕事だったのでしょうか。

服部：KABC-II が初めてです、あのような形で名前が出るのは。

鈴木：KABC-II のお仕事は偶然に出会ったのでしょうか。

服部：そうですね。最初のバージョンの K-ABC のときの松原先生<sup>10</sup>先が私の学生の頃の卒論の指導教員です。藤田先生は 2 年生のときのクラス担任だと思うのです、たしか。そういう関係も働いたかもしれません。図書文化社のほうは、ずっと前ですよ。だから KABC-II が始まる 20 年ぐらい前にそういう関係があって。図書文化社は設立されたときは教育大の中にあつたのですよね。名称はちょっと、正確に今、覚えていませんが、研究所がその中にあつたのです。今の国立大学の中では難しいと思いますが。

鈴木：筑波大学出版会のような感じですか？

服部：そうですね。東京教育大学の。当時の出版物は、その出版元の住所が東京教育大内になっていました。その研究所が出している、図書文化社が出している書籍の住所が教育大と同じでした。

### **KABC-II の作問の実際**

鈴木：ところで、KABC-II の日本オリジナルの問題について興味があるのですが、マニュアル（日本版 KABC-II 制作委員会，2013）を読んでいると、絵などの馴染みのないものを和風の「やかん」に変えました<sup>11</sup>と書いてありました。そういったオリジナル問題作成にも先生は関わったのでしょうか？

服部：それは、作問のところから全員で担当していました。私たちに加えて応用教育研究所からの協力がありました。ある程度は分担しましたが、例えば、習得度を測る漢字の問題、文章を書く問題など、素案作りで分担はありましたが、一つ一つの問題を全員で、丸善出版の方も含めて検討していきました。数名だけの検討会はもちろんありましたが、それとは別に、月に一度は全員で何十回も集まって検討してました。

鈴木：毎月。40 回以上になると、マニュアルの初めのほうに書いてありましたけれども。すごい作業ですね。

服部：朝から夕方まで続いたのではないですか、毎月 1 回は。その間に、それぞれ分担がある程度決まっていたから、個別に検討会を開いていました。習得度の下位検査ですと、熊谷先生<sup>12</sup>と私と、あと図書文化社の人と応用教育研究所の人が集まって、問題作りをしていました。分担ごとにデータを取って、ある程度集まったところで、また全体の会議のときに報告をして、どの問題を使う、

---

<sup>10</sup> 松原達哉(1930-)。東京教育大学大学院博士課程修了。筑波大学心理学系教授，立正大学教授，東京福祉大学教授，同大学学長。立正大学名誉教授，東京福祉大学名誉教授(松原，2019)。

<sup>11</sup> 日本版 KABC-II 習得尺度，語彙尺度のなぞなぞの問題では、日本の子どもに難しい単語である「コンロ」「ジャケット」の絵が「やかん」「皿」に変更されている（日本版 KABC-II 制作委員会訳編，2013）。

<sup>12</sup> 熊谷恵子(1958-)。1981 年，九州大学理学部化学科卒業，1990 年筑波大学心身障害学研究所修了。2009 年より筑波大学人間系教授(熊谷，2019)。

どの問題は使わない、どう修正するかなど、全員で検討していました。最終的には常に全員で。1問1問の作成はいくつかのグループに分かれてしていました。例えば、「表現語彙」という問題があります。写真や絵などを見てもらい、「これは何ですか」と問う問題です。「表現語彙」では何人かでグループを作って、材料をいっぱい集めてきて、自分の身近にいる人に試してもらい、利用できそうな問題に絞って全体の会議に持ってきます。そこでまたどれを予備調査に使えるか、検討していました。

鈴木：すごい仕事ですね。

服部：トライアウトがありますね。本当に最初に、ちょっと何人かで解いてもらうトライアウトの段階から、予備調査、本調査というか、予備実験、本実験、それぞれの下位検査、どれも段階を踏んで進めていました。

鈴木：マニュアルによると、天井効果が表れると予想された「近道探し」<sup>13</sup>などは問題数を増やしたと書いてありました。アメリカ版では天井効果はあまりなく、日本人では天井効果が出てしまうということでしょうか。

服部：そうなのです。同じ年齢の子どもでも、日本人はできてしまうのです。今おっしゃった「近道探し」もその1つです。

鈴木：はい。碁盤のようなところに行くのですよね。

服部：ええ。あれはアメリカ版だと、日本の子どもは皆できてしまうので、もっと複雑にしなければいけないということで、複雑な問題を作りました。日本人は得意みたいです。

鈴木：日本人にのみ天井効果が表れるというのは、日本人が優れている課題があるのでしょうか。

服部：そういうのは得意なのですかね。そういうのに子どもの頃からなじんでいるのではないのでしょうか、もしかすると。

鈴木：ああ、ゲームや何かでしょうか。

服部：ええ、そういうゲームのようなものなど。

鈴木：「近道探し」と「模様の構成」<sup>14</sup>、「パターン推理」<sup>15</sup>で同じように天井効果があるために難しい問題を追加したと書いてあって、流動性知能に近いのでしょうか。日本人はそういった空間把握などが得意なのでしょうか。

服部：そのようです。それで難しい問題を作成しました。「近道探し」なども。「近道探し」は青山先生<sup>16</sup>が中心になって難しい問題を作りました。ルールを少し複雑にて、升目を増やすなどして難しくしました。あと「近道探し」は正答を複数にしました。たくさんの方が出るといったような問題を作るなどしました。ちょっと横道に逸れますが、「近道探し」は実施が結構難しいかなというところがあって、日本版では「近道探し」は難しいからやめようかという話も出たことはあったのです。つまり子どもが自分の目の前でこうやって指を動かすわけでしょう。それをずっと見ていて、正しいかどうかを確認しなくてはならないから、判断がすごく難しいではないですか。どうしようかと。習得度のほうを

---

<sup>13</sup> 犬のミニチュアをチェッカー版のような図版の上で動かしてゴールまで最短の経路を見つける問題。

<sup>14</sup> 積木を用いて提示された図形と同じ形を作る問題。

<sup>15</sup> ある規則に従って並んだパターンのなかで、空欄に入るべき絵や図形を答える問題。

<sup>16</sup> 青山真二。1979年、北海道教育大学教育学部養護学校教員養成科卒業。1982年、筑波大学教育研究科障害児教育専攻修了。北海道教育大学教育学部教授（青山、2018）。

増やすということは決めてあったから、何か認知系の下位検査は削っていかなくてははいけませんよね。それで、「近道探し」を削ろうかという話にもなったのですけれども。こうした変更点についてはすべてカウフマン先生と相談していたのですが、カウフマン先生が来日されたときの検討会のとき、「近道探し」を削れないかと相談したところ、カウフマン先生が削ってはいけな

鈴木：書いてありました。マニュアルの巻頭、「カウフマン博士夫妻からのメッセージ」に、「青山先生は減らすところだったが、止めた」<sup>17</sup>のようなことが書いてありました。びっくりしました。何があったのだらうと思いました。

服部：カウフマン先生がすごくお気に入りの下位検査だったのではないのでしょうか。

鈴木：消してはいけなかったものなのですね。

服部：そう。結局、委員会というか、作成委員会、われわれの中でもやはり削ろうかという話になったのですけれども、これは本当にこうおっしゃったのです。「アメリカのテスターも近道探しはできるのだから、日本のテスターができないわけがないでしょう」とその場で。「採点はアメリカ人にだってできるのだから、日本人ができないはずないだろう」と。「これは削ってはいけな

鈴木：なるほど。前に WAIS のお話を山中先生からうかがった時には<sup>18</sup>、ウェクスラー式はアメリカの会社が介入して、世界中同じものにしなければいけないので、「語音整列」でステップを追加しようとしたところ交渉が大変だったとおっしゃっていました。でも、KABC-II マニュアルを読んでいると、カウフマン先生と直接やりとりできたという利点も含め、結構柔軟に項目を変えているのだと思いました。

服部：それは多分、契約だと思うのです、きっと。下位検査の構成や問題を勝手に変えることはできないでしょうが、変えてもよいという契約なのか、変えてはいけな

鈴木：なるほど。

服部：でも、開発も 3 ステップあって、例えば標準化をするときにデータを取りますね。そのとき、どういう子どもを対象に何人に協力してもらおうかという、そういうレベルから、データを取ったところで何人ぐらい取りました、これでよろしいでしょうかのような、順番にステップを踏んでチェックを受けていきます。チェックはアメリカのピアソン社<sup>19</sup>がしていました。

鈴木：著作権のようなのはその会社が仕切っているのですね。

服部：はい。調査計画や実験計画、それに取り終えたデータの人数や、それでよいのかどうかなど、そういうチェックをしていますし、この検査はもともと英語版ですが、完成した日本語版を全部英語

---

<sup>17</sup> 『日本版 KABC-II』（日本版 KABC-II 制作委員会訳編，2013）の巻頭 4 頁にある「カウフマン博士夫妻からのメッセージ」に、「青山先生から [近道さがし] の採点の難しさから、解検査から落とす可能性を提案されたとき、アランは「アメリカのテスターでも近道探しの採点ができるのに、日本のテスターができないわけではない」と応えました。この会話が [近道さがし]（の犬）を救ったと言えます」と記述がある。

<sup>18</sup> WAISIII の改訂作業に関する山中克夫のオーラルヒストリー（鈴木・小泉，2019）のこと。

<sup>19</sup> Psychological Corporation は、1921 年に心理学者 Cattell, J. M., Woodworth, R. S. & Thorndike, E. L. の 3 名が設立した心理検査と書籍の出版社。1939 年にウェクスラーベルビュー知能検査を出版、1970 年に Harcourt 社に買収され、2007 年には Pearson 社に買収された。

に直しているのです。英訳してあるのです。

鈴木：チェックしてもらうために？

服部：そうです。

鈴木：すごい労力ですね。

服部：もともとの英語版を日本語版にして、できたものは全部英語に直して。

安齋：また英訳して向こうでチェックをする。

服部：そうです。信頼性のレベルが期待されている通りの高さなのかどうかといったことや、妥当性の検証手順がよいかなど、チェックを受けています。そうしたチェックを受けるときはすごく緊張しました。当然ですが。必要な資料を用意しました。

鈴木：その計算の関係は服部先生が中心に準備されたのでしょうか？ 準備は大変な作業だったのではないのでしょうか。

服部：私を中心に皆で準備しました。確かに大変でした。四則演算のような単純な計算だけでは済まない作業がありますから。パソコンプログラムを作ってポンとやれば結果が出てくるというものではないですから。

安齋：そういった検査作りに情熱を注げるのは、田中寛一<sup>20</sup>DNA ですよ。筑波大の。代々知能検査を作り続けた DNA。

服部：そうですね。年齢によって下位検査が違います。そうすると、下位検査が違えば尺度も違うではないですか。そうすると標準化して換算点を出すときに、評価点や標準得点を出すときに、年齢ごとに作らないといけないのです。年齢といっても月刻みで 3 カ月刻みなど、換算表を見ると分かると思いますけれども、3 カ月や半年などで、これは年齢を区切って全部換算表を作らなくては行かないですから。楽な仕事ではないです。

安齋：パソコンがあっても大変ですよ。

服部：パソコンがあっても、プログラムを作らなければできません。プログラムができて、それだけでは処理できないところがありますから、時間が必要でした。

服部：パソコン、自宅でやっているときは、食卓にパソコンを置いて、資料を置いて、計算してこちらに線を引いてのような作業をやりました。それを延々と繰り返していくわけです。朝起きて 6 時半までとか。一日中、朝食、昼と夕ご飯以外はずっと、というのはもう何日も続きまして。年末とか正月、お盆もなかった気がします。家で、皆が年末楽しいのだろうな、お正月も楽しいのだろうなというときに、ひたすらずっと朝から夕方までやっている、右手の小指と手首の間が冷えて痛くなるのです。マウスを握って操作をしていると、冬になるとパソコンや机は冷たくて、小指と手首の間がすごく痛くなります。だから、サポーターや手袋をして作業を進めていました。パソコンを使い過ぎると痛くなりますよ。

安齋：開発者の苦勞ですね。

---

<sup>20</sup> 田中寛一(1881-1962) 1907(明治 40)年、東京高等師範学校英語科卒業。1913(大正 2)年、京都帝国大学文科大学哲学科心理学専攻卒業、東京帝国大学大学院に進学、東京高等師範学校講師、後に教授。1929(昭和 4)年、東京文科大学教授、他に日本大学教授、玉川大学学長を歴任。専門は、人間工学、教育心理学、教育測定、知能検査(大泉, 2003)。東京文科大学は、1949(昭和 24)年に東京教育大学となったが、1973(昭和 48)年の筑波大学設立に伴い、1978(昭和 53)年に廃止された。

服部：そうなのです。痛みを伴う。心のつらさと手の痛み。少しでも効率を良くしようとプログラムを組むのですけれども、なかなかプログラム、コンピューターだけではできないところ、やはり自分の目で見て微修正しなければいけないところがどうしても出てきます。それは多分、ほかのこういう検査は同じではないでしょうか。そこを何人でやっているかというのがあります、それは聞いてみたいですね。

鈴木：先生は KABC-II の統計はお一人でされたんでしょうか？

服部：パソコンを使った統計的な処理に限れば自分が中心でしたが、結果を皆で検討して次の計算をするわけですから、担当は皆です。アメリカ版の KABC-II や WISC や WAIS などがどうされていたのか知りたいですね。

安齋：統計の処理を行うときには、どなたかが知能検査を、K-ABC をお子さんなどに取って、データがまとめて送られて来たものを処理されたのでしょうか。

服部：そうそうそう。データ入力はまだ済んでいるわけです。順番に言いますと、初版の K-ABC を使われている先生方は既にいらっしゃいますね。

鈴木：講習会などのベテランテスターが全国それぞれの場所でリーダーをやって、そのリーダーがテスターに声を掛けてやったとマニュアルにあります。

服部：そうですね。K-ABC が使われていても、KABC-II は初めてですから、何回かリーダーになる方に集まって頂いて検査の手順を説明して、その後、協力して頂ける先生方にリーダーが手順を説明して、検査を実施しています。記録用紙の中にはいくらか不備もありますから、そういうのもわれわれの方で全部チェックしました。応用教育研究所の方ですから、お名前は出てきませんが、その方を中心にわれわれでデータをコンピューター入力する前に全部チェックして、不備があればそれを直してから、分析できるデータにしてから入力をお願いしました。もちろん、入力は専門業者さんですが。それを打ち込んだ後に私のほうに来るわけです。今、アメリカもそうでしょうけれども、標準化の手続きはすごく洗練されていると思います。

安齋：テスターもきちんと取れる人でないとできないですね。

服部：そうですね。WISC や K-ABC、もちろん K-ABC はもちろんですけども、WISC なども使われている先生方です。

鈴木：プロのテスター。なるほど。

服部：あとは KABC-II が初めてでしたから。ただ K-ABC のデータが蓄積されているので、一部をお借りして分析をしました。分析というか、テストを知るためにデータ解析をしてみて、その中でどういうことが本番の開発作業で起こるか、何が必要になるか、どういうことを準備しておかなくてはいけないとか、そういうのを前もって K-ABC のデータで体験しました。これは藤田先生の教育的な指導だったと思います。分析するときには本には書いてない作業も必要になりますし、それまで経験してない作業も出てきましたから、すごくよい経験でした。

安齋：K-ABC のデータはあったのですか。

服部：あったのです。その一部を借りて。生のデータが取ってあったのです。それを自分なりに解析をして、標準化をするときに必要になることについて、分析をする中で少しイメージを作ったということです。それは役に立ちました。藤田先生が私にやってみなさいと言ったのは、標準化するときいきなりの分析ですと大変になることが分かっているの、少し理解を深めておいてほしいという狙

いただいたと思います。このデータがあるから分析してみたらいいと、そうおっしゃってくれました。

鈴木：そのときは何の分析をされたのですか？ 年齢ごとデータを作られたりしたのでしょうか。

服部：いや、そこまではなかったです。

安齋：確認的因子分析のような？

服部：そうですね。そういう因子分析が中心でした。もちろん正誤データのみで年齢以外の個人情報が入っていませんが、素データから自分で尺度得点を出したりしました。もう随分、10年くらい前になってしまいますから、分析内容のすべては思い出せませんが、その中で素データではないと分からないことがあったと記憶しています。とにかく K-ABC のほうのデータを使って分析をしたことが、KABC-II の標準化作業のときに役に立ちました。

### 日本版 KABC-II の習得尺度について

鈴木：KABC-II 日本版では習得尺度を残したのが、アメリカ版と違うところとマニュアルに書いてありました。日本では確かに、学力検査で、個別式で簡便に幅広く取れるものはないだろうと思いました。それ以外に、日本の社会的な背景のようなものや、制度上の理由はあったのでしょうか。

服部：いや、それはどうだろう。制度上の理由はなかったと思いますけど。習得度を作ったときに問題になったのが、例えば7歳といったときに、学年が違う7歳の子がいますよね。そうすると、学年が違えば学校で教わっている内容が違うわけですから、そこをどうするかという問題がありました。やはり年齢で区切って評定基準を作らなければいけないですから。

鈴木：それはどうしたのでしょうか、先生。

服部：指導要領を参考にしました。例えば、文字を書くのは小学校ですよ、指導要領ですと。でも、小学校に入学する前に文字を書ける子は結構いるわけです。ですけれども、指導要領を意識すると、小学校1年生の場合に書きの問題などは使えないのです。同じ年齢でも学年は違うということがあるので、やはり指導要領を配慮して実施年齢は決めていました。そういうところはありました。

鈴木：そういう判断の一つ一つが、結構大変な感じがします。

服部：そうですね。そこが一緒に作業を進めた図書文化社と応用教育研究所は教育用の学力検査や心理検査をたくさん開発してきているから詳しいですよ。

鈴木：なるほど。

服部：それに、習得度については長く研究所に勤めていた方にも加わって頂いていました。検査全体はもちろんそうですけれども、特に習得度についてはアドバイスを頂戴しながら進めていました。例えば、書きの問題といったときに、「平仮名」「片仮名」「漢字」などがありますが、作問するときのどの片仮名を使ったらよいか、どういう問題、平仮名、漢字の問題を作ったらよいかなどのアドバイスです。偏りないようにバランス良く出さなければいけないではないですから。

鈴木：習得度だと、例えば小学校1年生に上がる前に80%の子どもが自分の名前やいろいろな平仮名が書けたとしても、文部科学省の学習要領に従わなければいけないのですね？

服部：そう判断しました。ですから、KABC-II は学力検査ではないのですけれども、やはり指導要領は優先していました。習得度についても。

鈴木：習得度の課題では、文科省についての記述が必ず解説に出ていますね。

服部：そうですね。漢字などもそうですよね。全部、配当学年の担当の先生（教諭）に意見を聞きながら。それと、国語科教育と数学科教育の専門家の先生にもアドバイスを頂きました。逆に年齢がすごく上に上がってしまいますけれども、例えば、アメリカ版（K-TEA）では微分や積分の問題があります。高校生は微分と積分を習いますよね。日本でも高校生であれば微分や積分などを習いますが、日本語版では、微分や積分がわかるような学力の高い子どもではなくて、苦戦している子どものほうを中心に見ていけるようにしようということにして、数学の問題は中学生までのレベルにしました。ですから、すごく数学が得意な高校生にとっては易しい問題になると思います、中学 3 年生までの内容ですから。しかも、教科書の内容から離れないような形で問題を作っていますから。そうした事情もあって、中学生以上ですと数学の問題などは天井効果が出やすいと思います。

鈴木：得意、不得意が随分ばらついてくる科目ですものね。得意な人にとっては、天井効果が出やすい気がします。

### **検査用具作成時の配慮**

鈴木：ところで、検査セットを実際に見ると、人物を探す写真などで外国人の写真を使用している。それが、授業で学生が見ると気になるみたいで、「何で日本版の検査なのに外国人なんですか」と聞かれるんです。

服部：いろいろな人種が入っていますよね。アジア系もいますよね、あの中に。これはアメリカ版のほうも配慮して、いろいろな人種、世界中の人種を満遍なく使っています、顔写真に。

鈴木：カルチャーフリーであると検証された、とは記述があったのですが、他の知能検査と比べて、あまり日本人向けに変えられていない印象があります。物品の色なども、「日本ではあまり使わないようなどぎつい青を使っているね」などと、安齋先生とも先ほど話していたんです。

服部：そうですね。

安齋：あの辺も皆そのままなのですか？ アメリカ版と一緒になのですか？ 三角形が黄色や青などの、例えばカードのようなもの。

服部：そうですね。でも、チップを並べる下位検査の難しい問題の一部は日本で独自に作っています。やはりアメリカ版のままですと、日本人の子どもは得意な課題だから、解けてしまうので。先ほどの「近道探し」のような問題ですよね。チップで模様を作る下位検査やパターンを推理する下位検査などでは日本版で難しい問題を作っています。

鈴木：実際の模様の三角の道具は、アメリカ版と材質というか、色なども変えずに？

服部：材質……、色は同じですけども、材質はどうでしょう。

鈴木：日本のどこかで作っているのですね。

服部：そうですね。子どもたちが怪我しないようなものにしないとイケないというのは、すごく注意していました。ほかにも、犬<sup>21</sup>（のオモチャの検査道具）も食べてしまったら困ります。

鈴木：そうですね。結構小さい犬ですね。

服部：受ける子どもたちが、実際には発達障害をお持ちのお子さんが受けることが多いから、そういうお子さんが間違っただけで飲み込まないように素材や大きさなどに気をつけました。こうした点は検討会でもよく話題になっていました。あと、犬の名前もどうしましょうかと。

---

<sup>21</sup> 「近道さがし」の道具である、オモチャの犬。「ポチ」という名がついている。

鈴木：楽しい相談ですね。

服部：あまりなじみのない名前では困るだろうと。確かに、そういう相談のときは楽しいですね。

鈴木：すごく細やかな配慮ですね。マニュアルを読むと、新しい語彙なども、どれほど出てくるか、統計データに基づき、細やかに調べていることが分かります。

服部：そうですね。語彙なども。

鈴木：魚や草の名前を覚えて、後に出てくる魚が「これは何の名前ですか？」と質問する問題、対連合記憶をする課題が、KABC-II で新しく入っていますけれども、それなどもアメリカ版と同じように、日本版の無意味つづりの連想価表を使ったりしたのでしょうか。

服部：あれも本当にトライアウトで、無意味つづりをいっぱい作って。

鈴木：作るどころからされたのですか？

服部：そうですね。無意味綴りの原案を作る担当は私ではなかったです。藤田先生だったと思います。アメリカ版の英語を使うというわけにはいきませんから。日本語ですと、二文字と三文字で無意味つづりを作らないといけません。いろいろな名前があります。あの絵で示す生き物自体はアメリカ版と同じです。

鈴木：アメリカらしい絵ですね。

服部：架空の生き物です。実際にいたら、知っているから覚えやすくなるので、見たことのないような生き物にしないといけません。それはアメリカ版でそういうのを作っていて、それをそのまま問題には使っています、名前だけは全部を変えて。この問題も日本の子どもはすごく得意です。

鈴木：覚えるのが日本の子どもは得意なんですか？

服部：そうですね。対連合記憶ですが、すごくよくできます。子どもだからできるのでしょうか。予想したよりもよくできていました。私は無理です。

鈴木：日本の人はこのような課題が得意という情報は、私自身は学生の頃も、働き始めてからも、接することがなかったように思います。

服部：多分、私などは分からなかったですけども、やはり藤田先生や石隈先生、あと青山先生、私以外の人は何年も、何十年もこういう発達障害をお持ちのお子さんに関わっていて、知能検査を使われているから、その辺はご存じなのだと思います。こういう分野は日本人好き、得意というのが。

鈴木：肌で感じて分かっていらっしゃるのですね。

服部：それはもう分かっていらっしゃるのではないのでしょうか。それと、藤田先生や石隈先生はウェクスラー式検査の開発にも携わっていらっしゃいました。あと青山先生と小野先生はウェクスラー式検査の著者ではないですが、検査を開発する過程で協力されていますので、詳しいです。だからもう全然、私などは知らなかったですが、初めからこの下位検査は日本人の子どもはよくできるから難しい問題を作らなくては駄目という感じで。もう藤田先生などはすぐおっしゃっていました。同じ問題は WISC にはないのですが、迷路を探索問題やパターンを推理する問題なども日本人の子どもは得意ということをご存じでした。あとは「絵の統合」もそうです。一部が欠けている影絵のようなものを見て、何に見えるかを問う問題です。これも日本人は得意なのです。この下位検査でも難しい問題を作りました。もちろんアメリカの子どもだったらよく知っているけれども、日本の子どもは分からない、見たことがないという問題は日本人の子どもはわかりません。ですから、そういう問題についても作り変えましたけど、難しい問題も作っていました。

鈴木：その日本人の得意さは日本文化のどこに生かされているのでしょうか。例えば宮大工などは能力が生かされているのでしょうか。

安齋：意外とアニメなど、クールジャパンなどに貢献しているのかもしれないですね。

鈴木：面白いものですね。それから、検査セットが大きく重くなりましたけれども。あれは、不便はないのでしょうか？ 服部先生に言うのも失礼ですが、よいしょと担いでいくのはなかなかの苦勞になってしまったと思って。

服部：そうですね、大変ですよ。もともと量が多いというのはあります。アメリカ版が第 II 版になるとき、認知系の検査で KABC-II が構成されて、習得度は KTEA-II<sup>22</sup>という別の検査になりました。ただ、アメリカ版の標準化は同時に行いました。だから、バッテリーとして使えるわけです。でも、日本では子どもの習得度と認知的な能力が同時に分かって初めていい検査になると考えていましたので、一つの検査として開発することになりました。発達障害をお持ちのお子さんなどでアセスメントをして、次にどういう支援をしたらいいかというときに、やはり認知系だけでは駄目で、やはり習得度のほうも分からないといけないということで、一緒にしましょうと。一緒に標準化して一つの検査にしましょうということです。だから下位検査が増えてしまったのです。

鈴木：だから検査セットが大きくなったんですね。

服部：機材を入れるカバンがありますよね。

鈴木：ええ。ソフトカバン。

服部：私の意見はすぐ却下されましたけれども、キャリアーにしたらどうかと。

鈴木：ああ、キャリアーの方が持ち歩きは楽だったかもしれません。私は K-ABC のイーゼルが好きなのですが、使いやすいし、子どもはこうやって問題が登場するとワクワクして見られるだろうと思いますけれども、あれがまた一つ一つ重いのが難点だなと。今度は 4 分冊になったのでこれは重い。肩が凝りそうな重さです。

服部：そうですね。あの入れ物もいくつか試作品を丸善さんが作って、それを皆でどれがよいか検討して決めました。キャリアーは試作品を作る前に外れました。私はキャリアーが一番いいと思ったのですが、怪我をしにくいと思ったので。私は重いカバンを背負っていたら怪我をしそうです。

鈴木：そうですね。電車には乗れません。ラッシュにはちょっと乗れないサイズになってしまっています。どこかに置いておいて、移動は考えなくなりそうです。

服部：そうですね。だから、専門家の心理士の方が出掛けて行って検査することがありますが、そのときに旅行かばんのようにタイヤが付いていれば、車からよいしょと下ろしてガラガラガラガラと。

鈴木：私もそれ賛成ですが、駄目なですね。残念です。

### **KABC-II のユーザー層**

鈴木：ところで、KABC-II は、実際どこで多く使われているのでしょうか。目的から考えると、療育センターなどでしょうか。

服部：そうですね。他には病院や児童相談所、最近ですと司法関係。鑑別所、少年院など。

鈴木：司法関係ですか。

---

<sup>22</sup> KTEA-II (カウフマン式アチーブメント尺度改訂版)。K-ABC から KABC-II に改訂される際に、アメリカ版では習得度尺度を外し、KTEA-II という別検査に独立させた。

服部：はい。相談室，鑑別所，少年院などです。あと学校でも使われる先生がいらっしやいます。幼稚園でも利用されています。学校や幼稚園には以前から K-ABC や WISC などに詳しい先生がいらっしやいます。そういう先生方が利用されています。特別支援学校や学級，そういうところでも。もちろん，大学の教員も多いです。

鈴木：なるほど。

服部：年に 1 回，学会があります。そういうところに参加するとわかります。医療機関からの問い合わせもありました。

### **KABC-II の理論的枠組み**

鈴木：KABC-II の理論構成がすごくしっかりしていて，しかも 2 つの理論，カウフマンモデルと CHC 理論に立脚しているのが素晴らしいと思いました。

服部：今，知能理論というと，CHC 理論というのが主流ではないでしょうか。一番洗練されている理論だと思います。この理論の枠組みで結果を説明できる検査が求められているように思います。古い K-ABC のルリア理論だけでは検査結果を解釈する際にちょっと物足りないのだと思います。CHC 理論に依拠して作成されていない WISC のような検査でも，CHC 理論の中でどう位置付けられるかという研究が進んでいます。そういう中でやはり CHC 理論も意識した上で KABC-II を作らないといけなかったということだと思います。きっとカウフマン先生もそうだったのでしょう。

鈴木：なるほど。背景には，知能理論の発展だけではなく，統計の発展もありますよね。CHC のキャロルも，因子分析によって知能の階層構造を作ったという話だったと思います。知能検査の始まりである，ビネーの難易度別とは違って。飛躍的に知能検査と知能の理論が発展した感じがあります。

服部：だから，WISC は理論がないというような，そういう言い方をされている人もいますよね。

安齋：カウフマンから見ると，やはりウェクスラーはライバルなんではないでしょうか？

服部：カウフマン先生は，WISC-R を作ったときの中心的な先生ではないでしょうか。

鈴木：エッセンシャルズシリーズもたしかカウフマンですね<sup>23</sup>。

安齋：でも，新しく作ったということはやはり。

服部：そうそう。だから，先生ご自身の理論で作りたいかたではないでしょうか。その辺は個人的に聞いたことはないですけども。

安齋：では，対抗という言い方は良くないから，WAIS には足りない，こういうものを測るといような。

鈴木：もっとここを測りたいというようなものがあつたのかもしれないですね。

服部：そうだったのではないのでしょうか。継次処理，同時処理，認知処理。認知処理から知能を測りたいかたではないですか。あと習得度との関係のような，WISC はないですものね。WISC に算数などがありますけれども，記憶のような課題になっているし。学力に近いものと認知系のと，両方が分かるように検査を作成したかたのではないかと思います。

安齋：やはり今うかがっていて思ったのは，発達障害の中でも学習障害を想定して検査を作成しているように思います。

---

<sup>23</sup> Lichtenberger, E. O., & Kaufman, A. S. (2013). *Essentials of WAIS-IV Assessment second edition*. Canada: Willy and Sons.のこと。

服部：そうですね、学習障害。もともとカウフマン先生は弱いところを強くしようということではなくて、その子の強みを利用して支援していこうという考え方の先生です。だから、日本でもこういう K-ABC を使っている先生方は習得度のほうも見て、K-ABC の認知系のほうで強みを判断して、同時系が強い、継次の方が強いなど、その個人の中での強みを生かして教材を作っていくわけです。漢字や計算など、その子の強みに合うような教材を作っていきましょうということをやっています。それでいろいろな工夫をして、学会のときに発表されたり、あとは「K-ABC アセスメント研究」という学会誌があるのですけれども、そういうところで指導、事例を発表されて論文にされています。いろいろな工夫があります、見ていると。

鈴木：工夫しやすいし、学校になじみやすい検査だと思います。

服部：そうですね。あとは、長所活用型ということで、藤田先生を中心に小さいお子さんから上のほうまで、小学校 1 年から上のほうまでいろいろな教材を、幼稚園も入っていますが、同時が得意な子にはこういう指導をしたらいいのではないかと、継次が得意な子にはこういう教材を作ってみたらどうかと、いろいろな提案をされています。それが本になって出ています<sup>24</sup>。その実践報告というのがあります。論文になったり、あとは全国に研究会があるのですが、そういうところで事例検討会があって、その指導についてお互いに意見交換をしたりなどしています。

安齋：現代の田中寛一イズムですね。教育に役立てようとしている。

服部：そうですね。田中寛一さんもそうみたいですね。知能の定義と厳密に考えずに、教育との関係があったら、その辺りを教育に生かすための知能検査のような位置付けだったのですね、きっと。

安齋：現代の田中寛一イズムを感じます。

### KABC シリーズの将来

安齋：今後の KABC-II の展開はどのような方向になるのでしょうか。

服部：まず、換算表のことです。換算表を見ながら標準得点や評価点を出すという、それは重要だと思うのです。どういうふうに検査が成り立っているか、どういうプロセスを経て数値が出てきているか、そういうのをある程度勉強するために、手作業というのを経験するのは必要だと思うのですけれども、今は、素点を入れると記録用紙がパッと完成するソフトができました。

鈴木：効率を良くする方向になるのですね。

服部：それは有料ですけれども、丸善さんが開発して、販売を始めたのではないですか<sup>25</sup>。

鈴木：欲しいと思う人はいっぱいいるでしょうね。

服部：あとは年に何回かそういう講習会を開いているのですけれども、それとはまた別に実施ビデオ、自分が勉強するためのビデオ、どういうふうに具体的に実施していくかという、それをビデオに撮って教材にしようということで、今年中に完成すると思います<sup>26</sup>。

鈴木：ますます発展してゆく検査ですね。

服部：そういえば、古い K-ABC だと、ビデオを作るということはそこに検査問題が出てくるではないですか。そこもやはり著作権の問題が、著作権というのかな、ピアソン社から実際の問題を使って

<sup>24</sup> 藤田和弘, 青山真二, 熊谷恵子(1998). 認知処理様式を生かす国語・算数・作業学習の指導方略, 図書文化社

<sup>25</sup> 日本版 KABC-II 制作委員会監修, 日本版 KABC-II 解析アシスト, 丸善出版

<sup>26</sup> 日本版 KABC-II 制作委員会監修, 日本版 KABC-II 実施ガイド DVDVideo, 丸善出版

はいけないと。だから、学習用のビデオ教材を作るために、またイーゼルを作っているのです。問題を作って。もちろん全部ではないですが。一つの下位検査についてそんなに長く撮れないから。

安齋：では、カードに魚が書いてあったら、分かりませんが、ちょっと違う魚にして、それをビデオに使うという感じですか。

服部：そうそう。そんな感じで全部作り変えて。実際の検査問題を使ってしまいますと、それが流出してしまいますね。ネットで公開する人もいるかもしれませんから。そういうのがあって、ピアソン社から実際の検査問題を一切使わないよという指示があったと聞きました。標準化のときの話になってしまいますが、私たちがピアソン社との契約に従っていろいろな準備をしても、社の窓口になる人の対応が期待したよりも遅いことがあって、最終的に刊行時期がちょっと遅れました。もうだいぶできているのに次のステップにいけないということがありました。

鈴木：勝手に進むわけにもいかないわけですね。

安齋：カウフマン先生が存命中にできて良かったです。

服部：2回お会いしたのかな。進め方以外でもすごくピアソン社は厳しかったです。日本版の作成スタッフは日本版の一部の問題を作っているのですが、著作権はピアソン社にあります。ですから、完成後に新しい指標を作ったときもピアソン社の許可を取っています。あとは開発中、刊行する前は検査名を使ってはいけません、外に。要するに、チラシや学会発表などで **KABC-II** という語を出してはいけないというルールでした。

安齋：そうしたら研究発表もしづらいですね。

服部：その辺は最初に思っていたのと全然違います。だから、新しく何かデータを集めて、ここに載せられないけれども、何かいろいろな知見があれば発表したいと思っても、それは許可を取らないといけないのです。

鈴木：それは例えば、開発に携わっていない誰かが研究する際も同じなのでしょうか。

服部：マニュアルに出ている数値から引用して計算するのはいいのではないのでしょうか。

鈴木：マニュアルからの計算や、事例研究でマニュアルに基づいて発表するのだったら問題にはならないのでしょうか。

服部：もちろん、自分でデータを取ったものは全く問題ないですし、あとマニュアルに出ている数値を引用するのであれば、学術書を書くときの常識的な手順を踏めば問題ないと思います。

鈴木：自分たちで作った検査、データなのに、何かやりにくいですね。

服部：だから、一般の研究とは違う仕事ですよ。きっと **WISC** も同じではないのでしょうか。 **K-ABC** を改訂して日本版の **KABC-II** を作ろうと動き出したとき、米国版は他社から出版されていたので、初版のときと同じような感じでスタートしていたと思うのですけれども、動き始めてからピアソン社になったので、丸善さんも大変だったのではないのでしょうか、想像ですが。

鈴木：なるほど。

服部：私の立場としては統計面やデータ面などでやり直しとなったら大変ですから、そうならないように注意しました。

## おわりに

本研究では、2013年出版の「日本版 **KABC-II**」の改訂において、標準化作業でノルム作成等の統

計作業と習得尺度の下位検査作成を担当した服部環へのインタビューを報告した。インタビューでは、計算作業の実際や、問題作成における配慮、海外原版の検査を改訂する際の困難等が語られた。

アメリカの KABC-II 原版と比較すると、日本版の KABC-II は、習得度を残し習得尺度として発展させた特徴がある。KABC-II 原版は習得度尺度を他の検査に分化させた影響もあり、K-ABC 原版からの変更で 8 下位検査が引き継がれ、8 下位検査が除かれ、10 下位検査が加わり、合計 18 下位検査 5 尺度となった。日本版 KABC-II は、原版の改訂で引き継がれた「なぞなぞ」「表現語彙」、改訂で除かれた「数的推論 (K-ABC では「算数」)」「ことばの読み」「文の理解」に加えて、「理解語彙」「ことばの書き」「文の構成」「計算」を含めた 9 下位検査 4 尺度の習得尺度と、11 下位検査 4 尺度の認知尺度の合計 20 下位検査 7 尺度で構成された。原版と異なり、日本版 KABC-II では、読み書きと量的知識について CHC 尺度で把握可能となっている。このような習得尺度の拡充については、「欧米では、学習障害を判断するために、全般的知的水準と学力 (achievement) 水準の差異のアセスメントを行うさまざまな個別式学力検査が存在する。(略) これまで、日本では、このような学力を判断する標準化された個別式検査がなかった。(略) 日本版 KABC-II の習得度は、その中でも基礎学力を測定できるものではあったが、読みや算数の一部の検査しか含まれておらず、中途半端であったという感がぬぐえない。(略) (日本版 KABC-II では) 少なくとも、「読む・書く・計算する・推論する」の 4 つについては、欧米並みに測定できるようにしている」(日本版 KABC-II 制作委員会, 2013) と説明されている。

一般的に、海外原版の知能検査を翻訳し改訂する場合、国際比較を可能とするために新たな問題を追加することは困難である。日本版 WAISIII の開発者である山中は、下位検査「語音整列」のブロックを考案し日本改訂版に取り入れた経緯について、歌でアルファベット順に親しむ欧米と異なり、あいうえお順に馴染みのない日本の文化に配慮したと述べた。だがインタビューでは、「あれが多分最後になるんじゃないかと個人的には思っています。今は原版のやり方を変えることはとても難しくなっているからです」と述べ、副読本の出版でも企画段階で海外原版の著作権を持つ出版社の許可を要するようになったと説明した(鈴木・小泉, 2019)。一方で日本版 KABC-II は、習得尺度を拡充する形で原版を改変している。この改変について『日本版 KABC-II』(日本版 KABC-II 制作委員会, 2013) では、「日本版 KABC-II については、開発の過程において Kaufman 夫妻との情報交換や助言を得て、作成している」と記載している。ウェクスラー式知能検査と異なり、原版著者であるカウフマン夫妻が存命であること、原版著者に直接交渉し了解を得られたことが改変を可能としたと考えられる。

習得尺度のなかで、日本オリジナルの項目はどのように作成されたのだろうか。『日本版 KABC-II マニュアル』には、「ことばの読み」と「ことばの書き」で、項目に用いるひらがな・カタカナ・漢字を小学校学習指導要領、中学校学習指導要領(文部科学省, 2008)の各学年の配当漢字、教研式全国標準学力検査、教研式目標基準準拠検査、漢字検定試験をもとに決定したと記述されている。「計算」では同様に、小学校中学校の算数科・数学科の学習指導要領(文部科学省, 2008)に基づき問題を作成したとある。インタビューで服部は、「習得度を作ったときに問題になったのが、例えば 7 歳といったときに、学年が違う 7 歳の子がいますよね。そうすると、学年が違えば学校で教わっている内容が違うわけですから、そこをどうするかという問題がありました。やはり年齢で区切って評定基準を作らなければいけないですから」「同じ年齢でも学年は違うということがあるのですけれども、やはり指導要領を配慮して実施年齢は決めていました」「漢字などもそうですよね。全部、配当学年

の担当の先生（教諭）に意見を聞きながら。それと、国語科教育と数学科教育の専門家の先生にもアドバイスを頂きました」と述べている。子どもが学校教育で学ぶ内容は、教育が行われる国や時代の文化と制度に影響を受ける。日本の場合は、文部科学省が約 10 年毎に改訂する学習指導要領によって教育課程（カリキュラム）が規定される。そのために日本版 KABC-II の習得尺度は、検査開発時の学習指導要領や教諭の意見を参照して作成され、結果として学校教育場面で直接利用可能な情報を提供することが出来た。しかし一方で、習得尺度の拡充は 2 つの課題を作り出している。第一に、学習指導要領の改訂は、習得尺度の改訂を必要とする。そのため、海外原版の改訂と異なる間隔での日本版の改訂作業が必要となる。第二に、学年別の基準に基づく習得尺度と、年齢別の基準を定める標準検査の違いをどのように理解し実践で生かすかという問題である。同一の年齢で学年が異なるという状況は、K-ABC のように知能と学力双方の測定に対応した検査だからこそ初めて生じた課題であるが、知能検査を学校教育現場でどのように利用するかという根本的問いを内包する課題ともいえる。

統計の観点から知能検査の歴史をみると、最初の知能検査である 1905 年のビネ・シモン式は 30 問の問題を難易度順に並べた形式で統計は使用されていない。だが 1911 年改訂版では通過率と度数分布が示され、子ども 5 名の再検査の結果が示された。1916 年発表のターマン (Terman, L.M.; 1877-1956) による「スタンフォード改訂増補ビネ・シモン知能測定尺度」(Terman, 1916) では、標準化被験者数は 1,378 名と増大し、知能指数 (IQ) の算出式が示され、教師による評価と知能検査による IQ とのピアソン相関係数が示された。その後ウェクスラー式知能検査では、点数式の導入により下位検査が構成され、偏差知能指数が導入された。1997 年の WISCIII 以降は、因子分析 (Spearman, 1904) による知能理論の発展に沿う形で、知能検査の因子構造がマニュアルに示されるようになった。現在の知能検査の標準化では、ノルム作成や妥当性・信頼性の記述のほかには検査で測定する能力の理論的根拠として因子構造が求められており、服部はその要望に応えた形で発表を行っている (服部他, 2007 ; 服部他, 2008 ; 服部他, 2014 ; 服部他, 2015)。

本インタビューは、統計作業の実際と分業化を伝えるうえでも興味深い。日本では、知能検査で用いられる統計が高度化するにつれて、統計を専門とする者が協力するようになった。1948 年発表の『実際の個別の智能測定法改訂版』(鈴木ビネー) (鈴木, 1948) には IQ 算出便覧が掲載されており、大阪市教育センターの図書資料・鈴木文庫には、鈴木自身がノルムづくりで使用した手書きのノートや通過率の図が残されている。1987 年に田中ビネーの改訂を手掛けた大川は、項目の通過率検討について「当時パソコンとかはない。通過率の検討にしても、手作業でした。手書きで A3 用紙に図表や通過率を書いて、それを今度はまた、短冊に移し替えて並べてという、そういう時代です」(鈴木, 2018) と語っている。本インタビューで服部は、「パソコンがあっても、プログラムを作らなければできません。プログラムができて、それだけでは処理できないところがありますから、時間が必要でした」「自宅でやっているときは、食卓にパソコンを置いて、資料を置いて、計算してこちらに線を引いてのような作業をやりました。それを延々と繰り返していくわけです。」と述べた。約 50 年のうちに検査のノルムづくりのための統計作業が、手書きからパソコンでの作業へと変化したこと、知能検査を開発者が単独に行う時代から、専門家との協働作業へ変化したことがうかがえる。現代の検査開発でみられる、専門家集団による組織的な協同作業としての知能検査開発 (鈴木, 2019) が、本インタビューでも確認されたといえる。

## 謝辞

服部環先生には、長時間のインタビューにご協力をいただいた。心より感謝を表します

## 【文献】

- 青山真二(2018). 青山真二<<https://researchmap.jp/read0065448>>(2019年9月10日)
- Binet, A., & Simon, T. (1905). Méthodes nouvelles pour le diagnostic du niveau intellectuel des anormaux. *L'annee psychologique*, 11, 191-244.
- 藤田和弘(2012). 藤田和弘<<https://researchmap.jp/read0132123>>(2019年9月10日)
- 服部環(2019). 服部環<<https://researchmap.jp/read0169708>>(2019年9月10日)
- 服部環・青山真二・石隈利紀・小野純平・熊谷恵子・濱口晴美・藤田和弘・藤原圭子(2007). 日本版 K-ABC の因子・平均構造モデル, 日本教育心理学会第 49 回総会発表論文集, 392.
- 服部環・青山真二・石隈利紀・小野純平・熊谷恵子・藤田和弘(2008). 日本版 KABC-II の標準化に向けて：予備調査, 日本教育心理学会第 50 回総会発表論文集, 227.
- 服部環・藤田和弘・石隈利紀・青山真二・熊谷恵子・小野純平(2014). 日本版 KABC-II の尺度構成と標準化, 日本教育心理学会第 56 回総会発表論文集, 276.
- 服部環・藤田和弘・石隈利紀・青山真二・熊谷恵子・小野純平(2015). 日本版 KABC-II の尺度構成と信頼性, 日本教育心理学会第 57 回総会発表論文集, 247.
- 海保博之(2006). 海保博之<<https://researchmap.jp/read0018303>>(2019年9月10日)
- Kaufman, A. S., & Kaufman, N. L. (1983). *Kaufman Assessment Battery for Children*. Circle Pines, MN : American Guidance Service.
- Kaufman, A. S., & Kaufman, N. L. (2004). *Kaufman Assessment Battery for Children Second Edition*. Circle Pines, MN : American Guidance Service.
- 熊谷恵子(2019). 熊谷恵子<<https://researchmap.jp/read0185304>>(2019年9月10日)
- 松原達哉・藤田和弘・前川久男・石隈利紀(1993). K・ABC 心理・教育アセスメントバッテリー. 丸善メイツ. (Kaufman, A. S., & Kaufman, N. L. (1983). *Kaufman Assessment Battery for Children*.)
- 松原達哉(2019). 松原達哉<<https://researchmap.jp/read0045295>>(2019年9月10日)
- 日本版 KABC-II 制作委員会 (2013). 日本版 KABC-II. 丸善出版. (Kaufman, A.S., & Kaufman, N.L.(2004). *Kaufman Assessment Battery for Children Second Edition*.)
- 大泉 溥(編)(2003). 日本心理学者事典. クレス出版.
- Spearman, C. (1904). "General intelligence," objectively determined and measured. *American Journal of Psychology*, 15, 201-293.
- 鈴木 治太郎(1948). 実際の個別的な智能測定法. 東洋図書.
- 鈴木 朋子(2017). 鈴木ビネー知能検査改訂への道：心理検査出版社社員へのインタビューから 横浜国立大学教育人間科学部紀要, I 教育科学, 19, 85-101.
- 鈴木 朋子(2018). 田中教育研究所における知能検査の継承：大川一郎・中村淳子へのインタビューから 横浜国立大学教育学部紀要, I 教育科学, 1, 95-112.
- 鈴木 朋子・小泉 晋一(2019). 日本におけるウェクスラー知能検査(WAIS-III)の改訂：山中克夫への

- インタビューから, 横浜国立大学教育学部紀要, I 教育科学, 2, 95-114.
- 鈴木朋子・溝口元(2015). 心理学から見た長谷川式簡易知能評価スケールの特徴: 長谷川和夫へのインタビューから, 横浜国立大学教育人間科学部紀要, II 人文科学, 17, 11-27.
- 鈴木朋子・鈴木聡志・安齋順子(2016). ウェクスラー式知能検査本邦導入の背景: 品川不二郎・孝子へのインタビューから, 横浜国立大学教育人間科学部紀要, II 人文科学, 18, 1-18.
- 田中 寛一(1947). 田中びねー式智能検査法. 世界社
- Terman, L. M. (1916). *The Measurement of Intelligence*. Boston: Houghton Mifflin.
- 図書文化(2019).会社案内<<http://www.toshobunka.co.jp/corporate/>> (1919年8月31日)
- Wechsler, D. (1939). *The Measurement of Adult Intelligence*. Baltimore: Williams & Wilkins.